



しらすぎ

目黒区立第八中学校
学校だより NO. 5
(通巻49)
平成26年(2014)
6月2日(月)

『修学旅行 無事終わる』

校長 飯野 博史

京都・奈良修学旅行が無事終了しました。2日目午後には雨が降りましたが、1日目と3日目は快晴で、気温28度を越える蒸し暑さでした。

出発式で、私は生徒たちに次のように話しました。「楽しく思い出に残る修学旅行にしよう。そのためには、きまりを守る、周りの人たちのことを考えて行動する、健康管理をする、この三つを徹底しよう。」

2日目、ある班の京都班行動に同行しました。班員が協力し、地図を見たりバス停を確認したり「班行動を成功させよう」という意識がうかがえました。今までの宿泊行事や校外学習の成果が生かされているのを感じました。雨でバスが遅れ、到着時刻が遅れる班がありましたが、大きな事故もなくどの班も大きな成果をあげて宿舎に戻ることができました。3年生の成長を感じました。

運動会、修学旅行と大きな行事が一つずつ終わっていきます。今月は進路説明会、中間考査があります。3年生には新たな目標に向かって一日一日を大切に、さらに協力し合って生活して行ってほしいと願っています。3年生の保護者の皆様には、旅行費の積み立て、健康管理などご協力をいただきました。ありがとうございました。

5日(木)2年生の鎌倉校外学習、25日(水)から1年生と1・2年E組の八ヶ岳自然宿泊体験教室があります。3年生に続き成功させましょう。期待しています。



奈良公園にて



すき焼き鍋を囲んで



E組USJ見学

■開校記念日 講演会

5月30日は開校記念日です。本校は昭和22年に開校しましたので、今年で開校67年目を迎えました。

開校記念日には例年、地域の方、八中卒業生などをお招きしてお話をうかがっています。今回は吉田昌義先生(聖学院大学人間福祉学部子ども心理学科教授、目黒区教育委員会特別支援教育推進員)からお話をうかがいました。吉田先生は八中の卒業生であると同時に、教員として13年間八中に勤務されました。とくにE組の教育の充実に尽力されました。昔の八中の様子だけでなく、障害のある人たちも共に安心して暮らせる心豊かな社会にするにはどうしたらよいのかといったお話もうかがうことができました。お互いの良さや違いを認め合っていくことの大切さを改めて感じました。

5月30日 開校記念日 美しくも哀しい『しらさぎの伝説』

開校記念日にちなんで、本校の校歌と校章の由来についてご紹介します。第六代大脇憲三校長先生（故人、昭和38年4月～昭和45年3月まで在職）のお話を当時のPTA広報担当の方が聞き取ったものです。



目黒区立第八中学校校歌

佐藤春夫 作詞

大中寅二 作曲

君は聞かずやむさし野の

碑ひふすま衾あたり伝えいう

信義に生きし白鷺の

形見と咲ける野の花ぞ

今わが校の記章しるしなる

君は見ざるや目黒区の

竹より直く学ぶ子は

正義と真理愛しつつ

命の華を生ききそい

みな勤いそしみ労に楽しむを

作詞の佐藤春夫さん（一八九二～一九六四）には『田圃の憂鬱』『春夫詩抄』（いずれも岩波文庫）などの作品があります。作曲の大中寅二さん（一八九六～一九八二）の代表作として『椰子の実』（島崎藤村作詞）があります。

我が八中の校歌の歌詞、又校章にデザインされた「さぎ草」の由来を、皆様ご存じでしょうか。

さぎ草は高さ15～20センチメートルの多年草の湿地ランの一種で、世田谷区の花に指定されています。昔、碑衾村と言われた八中所在地あたりから、世田谷区奥沢鷺の谷にかけて、田圃のあぜ道にやさしい白い花を咲かせていたと言われております。

この小さな花には次のような悲しく、美しい話が伝えられています。

今から650年程前の室町時代のことです。世田ヶ谷城主の吉良氏が住んでいました。

この城主の奥方は、奥沢城主大平氏の娘でトキワ姫といい、戦国の世に見られた両城主との間をつなぐための政略結婚でした。しばらくは平和な生活が続きましたが、ある時、領地の境界の争いから遂に二人の城主が戦うことになりました。大平方の一隊は吉良方の世田ヶ谷城近くまで攻め込みました。

トキワ姫は大変この戦いに心を痛め、講和か救援を頼むほかはないと思われ、以前より可愛がっていた一羽の白鷺を使いとして、脚に手紙を結びつけて放ちました。白鷺は城の上空を二、三回飛び回ると、古巣である奥沢城に向かって飛び去りました。

ちょうど今の八中あたりまで来た時、敵兵に見つけられ、弓で射ち落とされてしまいました。羽を打ち抜かれた白鷺は、白い体を真っ赤な血で染めながらもバタバタと懸命に飛び上がろうともがきましたが、力尽きて息絶えました。

世田ヶ谷城はトキワ姫と白鷺の努力もむなしく敵の手に落ち、トキワ姫も自害しました。

しかし、その後白鷺の死んだ田圃のあたりから一本の草が生え、白い花をつけました。よく見ると白鷺が足に短冊をつけて飛んでいるようです。

これを知った人々は、白鷺の魂が花になって生まれ変わり、自分の主人のために信義に生きようとした姿だと白鷺の死を悼み、さぎ草を形見として大切に育て、またこの話を永く伝えました。

今は九品仏のさぎ園など限られた場所でしか見られなくなったさぎ草ですが、八中が創立された折、校章にデザインされ、また校歌の作詞を依頼された佐藤春夫先生もこの伝説に感銘を受けられ、「信義に生きし、白鷺の形見と咲ける野の花ぞ…」と歌い込まれたそうです。